

ふるさとの再創造を希求して ——「南茅部沿岸漁業大学」の歩み——

藤 本 伸 治

(北海道南茅部町教育委員会)

1 漁業のふるさと南茅部町

当町は、渡島半島の北東部に位置し、函館市から車で約50分、川汲峠を越えると亀田山脈を背に太平洋にひろがり磯浜づたいに東西36.3kmに細長く伸びる漁業の町です。

人口約1万、世帯数2,579戸でその70%が漁家戸数で占められ、主に定置網22か統・サケ・マス・コンブの増養殖・関連水産加工工業等に従事し、昭和53年の漁業生産推移を調べてみると、漁類22億・水産動物9億・コンブ19億・その他を含めて総計55億の水揚高を示しています。

昭和53年7月1日には延宝5年(1677)能登の人、飯田屋与五左衛門が尾札部で漁業を拓いて300年にあたり、漁業開拓三百年の記念式典が行われました。

また古くは天保10年からの北海道建網大謀網の発祥地でもあり、寛政11年には箱館在六ヶ場所の一つに数えられ、昆布・鱈・ナマコの名産地と知られ、中でも尾札部白口浜昆布は「献上昆布」として珍重され、現在もなお天然コンブ漁家約1,700戸、養殖コンブ漁家約600戸を有し、南茅部町を昆布のふるさとといわれる由縁でもあり、漁業の歴史の古さがうかがわれます。

漁業の歴史のみならず南茅部町の先史を物語る84個所にわたる埋蔵文化財包蔵地(遺跡)をみるときに先人の生への智恵と巧みさと逞しさにはただただ驚嘆を憶えるとともに、特に本年6月国の重要文化財指定をうけた著保内野出土「漆を塗った中空土偶」を目のあたりにするとき、縄文文化から統縄文文化の土の香りと芸術性の高さに一瞬タイムトンネルを越えて先史の扉の前に立たされているような錯覚に陥らせる人類の歴史を探る町でもあります。

2 南茅部沿岸漁業大学の生誕の概要

この構想のスタートは、採る漁業から育てる漁業への転換期の真只中の昭和46年の第一回町づくり研究大会であり、当時助役（(前)町長）であった佐藤貞勝氏が「南茅部の将来を語る」という演題で講演した時に「漁業近代化と育てる漁業への脱皮」の項での事業計画に「漁民大学開校」が提唱されました。

その後、昭和49年の「町づくり基本計画——漁業のふるさとづくり——」の中で、また昭和50年には世界に目を開いた漁民を育てるために漁民大学を……と重ねて提唱し、それをうけて昭和51年には教育委員会事務局段階で第一次試案が出され、その後二百カイリ問題をも反映し、名称も漁民大学から沿岸漁業大学へ変えるとともに幾度となく試案づくりを重ね昭和52年10月には「南茅部沿岸漁業大学開設準備室」が発足し、教育委員会社会教育課が主軸になって構想の骨組みの理論化と開設のための諸機構の整備につとめ、昭和53年4月には南茅部町・漁業協同組合・教育委員会の三者による「南茅部沿岸漁業大学設置協議会」が発足し、運営委員会、開設要項検討特別委員会、学習指導・計画委員会が設けられ、南茅部沿岸漁業大学開設要項案の審議・検討に入り「豊かな漁業文化の創造と育成のために沿岸漁業従事者各々が、すぐれた生活理念と正しい価値観を身につけ、より豊かに、より安全で、生きがいに満ちた生活が営める生涯教育の場とする」を目的として、同年7月7日の開講式・記念講演をもってスタートしました。

3 南茅部沿岸漁業大学構想の展開から開講への背景

さて、構想の展開から開講への道程を支えてきたバックボーンは何なのか。

(一) ものづくりから人づくりの土壌形成へ

それは町民があらゆる機会に現実を直視した冷静な判断力と、その裏づけになるデータを一定の教育機会に身につけ咀嚼した時には直接的・間接的に自らの生活の場に反映し、その総合的な成果が地域社会構成員の民力（民度）としても評価されるだろうし、その集約点が「まちづくりの力」となるという前提にたっているのです。

その実感として、この地に生きている喜びを肌で感じ、心でも感じる事ができる。そんな町、そんな町民をどう息づかせ、活動の実態と場をどこに設定するかという時に、町民（国民）総学習時代がこの小さな町にもやってきているという現実の中で、町行政も、ものづくり第一主義から人づくりのための土壌づくりを主軸に教育作

用の必要性・緊急性を町づくりのビジョンの中にも的確に位置づけていかなければならないというひっ迫した思索と性急には、培うことのできない望ましい「浜の町民像」への深遠な期待感が底流に秘められているからです。

(二) ぐるみの教育（学習活動）

従来、人づくりは学校教育に委ねて（近年は社会教育も入っているが）という教育行政の範疇を越えることに躊躇したり、消極的であることの反省と町を支える町民は地域に生きる生産人・家庭人・社会人であるという前提に立てば、豊かな町づくりと、そのためのちえづくりの機会をどう構築していかなければならないかという壁にぶつかるが、その壁をぶち破る手だてとして「ぐるみの教育」が必要になってくるのです。

そこで考えられたのは、今までの児童生徒を中軸に据えた学校教育型から、その地を生計の糧とする町民（成人）のための教育機会をどこに求めるか、だれがその機会を保障し、どう具体化するかというときに生まれたのが「ぐるみの教育」で、その実態としてでてきたのが南茅部沿岸漁業大学の三者協同設置方式であり、その方式の具体的展開のためのスタッフには町水産課、町民課、教育委員会など町行政機関をはじめ、北大水産学部・道立南茅部高等学校・道立栽培漁業総合センター・道立函館水産試験場等の教育機関を擁し、相互協力・連携を密にしての学際的關係や研究を重視し、且つ、その中で組みたてられた教育機会の提供や、生涯学習への働きかけが、学習主体者である町民に、どんな仕組みで、どう互いに磨き合うか、それが町民の現実の生活にどう役立ち、受益効果がどうなるのかということを行行政点・教育視点・経済視点の三視点からの客観考察を加えたときに、コミュニティの再創造論の教育方法が明確になってきたのです。

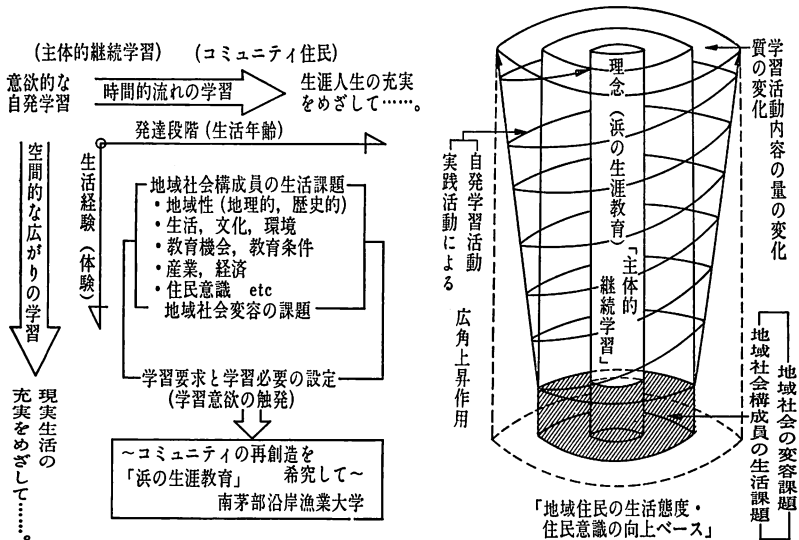
このことによって、わが町はわが手でという学習する町民への変身と、変身のための行政上の人づくり施策の重要性が浮上し、合わせて、豊かな町づくりの映像がイメージ化されてくるのです。

4 「浜の生涯教育」の構造

前述のように町づくりと人づくりのための行政での土壌形成と教育的作用の相乗効果を期待するときに、次のような教育構造をたて具体的な展開のための基本的な考え方をイラストレートした。

この図でわかるように、単なる各人の年齢期、世代期の充実のための学習、つまり時間的な流れの中の学習だけでなく現実の生活をどう豊かに過ごすかという空間的な

図 生涯教育の構築と地域社会の変容



な学習体系にもとづいた学習課程及び学習内容を審議していただき、南茅部沿岸漁業大学開設要項（昭和58年10月1日から設置規約とする）をまとめ、学習活動を展開することになりました。

表1 学習課程・期間及び定員

学習課程	専 修 課 程	特 別 課 程		
		ミセス専科	高齢者専科	社会教育通信専科
学 級 名	「がんばり！ とうさん、に いさん勉強 室」	「はっする！ ママ勉強室」	「どんとこい！ おじいちゃん おばあちゃん 勉強室」	「なんでも挑 戦！勉強室」
開設期間	4月～3月（8 月～9月休み）	左 に 同 じ	左 に 同 じ	常 時
学習期間	年 限 な し （昼間・夜間）	年 限 な し （昼間・夜間）	年 限 な し （昼 間）	年 限 な し
定 員	制 限 な し	左 に 同 じ	左 に 同 じ	左 に 同 じ
学習形態	集合学習・移動 学習	左 に 同 じ	届 ける 学 習	集合学習・個人 学習
◎ 特別公開講座（資格取得講座・公開セミナー）は、だれでも受講できます。				
◎ クラブ活動 → 各種の試験、研究、調査等。（実習）→常時				

表2 学習内容

専修課程	国際交流および国内の先進地研修
○資源管理型漁業と増養殖	○発展途上国（18か国）との交流 （約20名が一日入学一例年）
○水温、海流、栄養塩等、海のこと	○アラスカ州立大学等との交流
○漁村生活と漁業法等	○各国の留学生～ホームステイ
○商工業者の経営学	○アラスカ州（アメリカ）へ町内漁 業青年（沿岸大生）を派遣
○成人病予防、健康づくり等	○東北地方等へ漁業研修派遣
○資格取得講座	クラブ学習
・四級小型船舶操縦士	○海を拓く会（定置網漁業の未来像 研究）
・ガス溶接技能	○ウニ増養殖研究クラブ
・玉かけ技能	○こんぶ標本製作クラブ
・無線（電話甲）技士	○魚類くん製研究会等
・レーダー技士等	
ミセス、高齢者専科	
○子供のしつけ	
○郷土の料理アラカルト	
○おとしよりの役わり	
○成人病予防	
○健康づくり等	

◎ 学習認定

○学習認定……学習内容の履修をおえた時は、単位として認定し、証書を交付します。

- ・一般教養～1単位、技能専門～1単位、資格取得1種目～2単位
- ・特典……学習成果の著しい者には、道内・道外・海外への研修派遣等の機会も与えられます。

6 「南茅部沿岸漁業大学」運営の足跡

昭和53年7月に開校以来、昭和58年3月までの約5か年にわたって生涯学習の機会提供をすすめてまいりましたが、その間の開講数292回、延べ学習者9,253名にものぼり、赤ちゃんからおとしよりまで含めた町民一人が1回受講していることになります。(編集部注・省略)

7 新しい生涯学習のうねり

「地域住民のためのコミュニティカレッジ」の実現をめざして、三者(町、教育委員会、漁協)が一体となってすすめてきた[・]_・[・]くみ[・]_・[・]の教育が、学習の主体者である住民の手によって、新しい生涯学習のあり方にせまる学習深化の形態が、着実に息吹きはじめました。このことは、従来の学習機会への参加学習から一歩つきすすんだ生産活動と結びついた学習の開発であり、マクロ的な視野から漁業人としての識見の陶冶と、国際感覚での日本の漁業や、地方の漁業への関心の高まりへと質的な学習変化がみられ、地方の漁業の町にも新しい生涯学習のうねりが感じられるのです。

(一) クラブ研修と開発研究

前述の項6「南茅部沿岸漁業大学」運営の足跡で学習一覧をまとめましたが、漁業者、町民としての基礎的な学習研修活動が定着するにしたがって、わが町では、わが家の漁業経営体ではという視点を倒置した発想が生まれ、専門的、高度化された生涯活動や地域環境(生産環境)の開発を考えるようになり、共通した課題意識を持つ学習者から、個人学習を越えたサークル学習や、研究開発グループが誕生してきたのです。

- コンブ生産研究グループ
- ウニの人工種苗研究グループ
- サケ・マスふ化実践グループ

○海を拓く会（若年定置網経営グループ）

（二）道内、道外国際研修交流

このことについても、前述の項6「南茅部沿岸漁業大学」運営の足跡にまとめてありますが、道内、道外研修視察にあつては、先取の気概をもって隔年ごとに道内外の漁業先進地を訪れ、沿岸漁業大学で学んだ知識と体験的实践学習をオーバーラップして、実証に努めています。特に地方の町村にあつては、国際研修交流は、その土地の自然風土、施設、住民気質、言語などマイナス要因が多く、スムーズな展開はなかなか困難であるが、近年では、51年9月からは、神奈川県国際水産研修センター沿岸漁業普及コース研修団（インド、メキシコ、中南米諸国等）の短期研修。

53年から55年にかけて断続的であるが、日本（南茅部）、アメリカ、カナダの3国による八木遺跡研究プロジェクトが編成され地元の民家を借り上げての研究活動が続けられ、日常生活でも住民と接触が深まり、小さな漁業の町に人際交流の波紋が広がっていきました。

54年以降には、アラスカ州立大学ハンクベントレ教授の「アラスカの漁法」の公開講座を皮切りに、アラスカ州立大学・アルゼンチン大学・カナダバンフォーールド臨海実験所の漁業視察・アラスカ州派遣エスキモー高校生の短期研修留学の受け入れ、56年には、南茅部沿岸漁業大学の設置者の一員でもある南茅部町長が、アラスカ大学の招へいを受け、講演と漁業実情視察が実現し、国際研修交流の扉が、広く開かれるようになりました。

8 アラスカへとぶ

このような、新しい生涯学習のうねりの中で、ついに漁業青年の海外研修派遣事業が陽の目をみることになりました。海外派遣事業要項の中には、

- 漁業者教育・成人教育の実情視察
- 北方圏における衣食住と北海道の衣食住の比較研究
- 漁業者の余暇時間の利用（生活実態・芸術文化と関係施設の視察・実習）
- 未利用資源の活用に関する技術交流
- コミュニティカレッジ一日入学
- 現地漁業青年との交流及び民泊による生活体験学習

を研修目的とし、昭和58年1月4日から13日までの10日間のアラスカ研修が実現しました。

研修視察の主たるものを列記してみると、水産関係省庁・水産施設・アラスカ州立

244 会 員 寄 稿

大学表敬訪問・コミュニティカレッジ視察・水産関係会議傍聴・水産研究所でのサケのふ化放流の比較研究・トローリングの体験乗船・漁具の改良及び資格取得のための漁業者研修トレーニングセンター視察・民泊による生活体験と広範にわたる日常生活の比較研究など多岐にわたる研修視察になりました。